

## 伊勢市長賞

「しせつに住んでるおばちゃん」

有緝小学校

四年

森 もり

優華 ゆうか



わたしは、夏休みに、しせつにおばちゃんに会いに行きました。

「あなた、だれや。」

おばちゃんは、いつもわたしのことをだれだか分かっていません。まず、わたしは自己紹介をします。そして、おばちゃんが楽しくなるようなお話を作って聞かせてあげます。耳の遠いおばちゃんは、何度も聞き返してつかれてしまいます。前は色んな返事が返ってきたけれど、最近はそうかあやよかたなと返してくれます。それでも、帰ったあとまた会いたいと言ってくれるんです。話す内ようはわすれてしまっても、きつと楽

しかつたとかそのときの気持ちはのこっているのではないかと感じました。

おばちゃんに会いに行くときは、アンという犬を連れて行きます。おばちゃんは、とてもよろこんで手をのばそうとします。そして、アンをペロと呼びます。ペロというのは、おばちゃんがかつていた犬です。おばちゃんも、アンをペロとかんちがいしているみたいでした。でも、おじちゃんは違うとは言いません。おばちゃんが不安になるようなことは、言わないようにしているそうです。それってすてきだなと思いました。

わたしも、うっかりわすれてしまうことがあって、認知しようになっちゃってしまったのかと心配になりました。調べてみると、認知しようはその物事自たいをわすれてしまっているようです。わたしがわすれてしまっているのは、一部分だけでした。だから、認

知しようではないのだと思います。認知し  
ようになると、今までふつうにできていた  
ことができなくなるので、同じように生活  
するのがむずかしくなるそうです。わすれ  
てしまったり、わからなくなってしまうの  
は、のうの病気によるものです。しかし、で  
きないことがふえて気持ちが落ちこむこと  
で、心が病気になってしまう人もいるそう  
です。やる気がなくなったり、おこりっぽく  
なってしまうと知りました。心や気持ちの  
問題は、まわりの人の関わり方が大切です。  
認知しようの人をひ定したりせず、そば  
にいて気持ちを受け止めてあげたいです。  
お年よりや認知しようの人たちが生活しや  
すくなるように、わたしの出来ることをや  
りたいと思いました。

わたしは、おばちゃんとの思い出を思い  
返しました。優華ちゃんにに合いそうと、か

わいい服をよく買ってもらいました。遊園地や水族館に連れて行ってもらった楽しい思い出があります。そんな思い出も、おばちゃんにはわすれてしまっています。おばちゃんかわすれていても、わたしがおぼえているのでだいじょうぶです。何度でもわたしがお話を聞かせてあげたいです。おばちゃん、また会いに行くので元気で待っていて下さい。



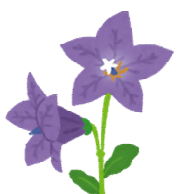
## 伊勢市制施行20周年記念賞

「認知症ってなに？」

小俣小学校 六年 西川 莉乃

にしかわ

りの



「じいじは認知症になったんやよ。」

お母さんからそう聞いたとき、私は「認知症ってなに？」と思いました。そのとき私は小学三年生で、聞いたことがない病気だったから、おじいちゃんは前とどこが変わったのか正直分かりませんでした。なのでお母さんやおばあちゃんに認知症について聞いてみました。認知症は、脳がだんだんうまく働かなくなつて、色んなことを忘れてしまう病気だそうです。それを知ったとき、なぜや熱みたいに薬で治すことができないのかなと思いました。おばあちゃんに聞いてみると、悲しそうな顔をして、「症状をゆっく

りにする薬はあるけど、完全に治すのは難しいんさ。」と教えてくれました。それを聞いて、私は悲しくて泣いてしまいました。認知症と聞くととまどってしまい、どう話せばいいのか分からなくて、私からおじいちゃんに話すことが減ってしまいました。でもお姉ちゃんは、楽しそうにうまく話をしていました。おじいちゃんはどう話せばいいのか分からなかった私は、うまく話すコツを聞いてみることにしました。するとお姉ちゃんはこう教えてくれました。

「自分も最初はとまどったけど、話しても伝わらんからって話しかけやんのも違うと思うから今までと変わらずにふつうに接しとるよ」私は認知症というだけで難しく考えていただけで、いつも通りに変わらず接すればいいということが分かりました。でも、おじいちゃんを前にすると、色んな気持ち

ちがこみ上がってうまく話すことができま  
せんでした。

そんなある日、学校で一枚のおたよりが  
配られました。そこには、「認知症キッズサ  
ポーター」と書かれていました。これを受け  
たら、おじいちゃんの気持ちや接し方が分  
かるかもしれないと思い、受けることにし  
ました。この講座では、認知症は環境や周り  
の人の接し方で症状が変わることや、認知  
症の本人が自分の変化に一番気付いていて  
おかしいなと思っっていることを知りました。  
そして私がおじいちゃんに話しかけること  
が減って悲しませてしまっているかもしれ  
ないと思いました。それから、とまどいま  
がらも前と同じように話しかけたり、おじ  
いちゃんがまちがったことをしてもひてい  
しないことを心がけました。すると、おじい

ちゃんの笑顔が増えた気がしてうれしかったです。

認知症と診断されて三年たって症状は進んでいて、私の名前も忘れてしまったけど「おはよう！」と話しかけるとにこにこ笑顔になってくれます。これからもどんどん話しかけておじいちゃんが安心して過ごせるようにサポートしていきたいです。

世の中には私のように認知症と聞いてとまどってしまふ人がたくさんいると思います。そんなときはきよりをおいたり、ひいていたりせず、いつも通り優しく接してあげてほしいなと思いました。



## 伊勢市教育長賞

「みみがきこえにくいおじいちゃんとの  
はなしかた」

明倫小学校 一年

野村 のむら

鈴乃 すずの



わたしのおじいちゃんは、わたしがおうちにくくと、とてもよろこんでくれます。てのひらに十円玉や小さいものをかくして、どっちのてにはいつてるかげーむなど、いっしょにあそんでくれます。おじいちゃんがかたべておいしかったものを、わたしにも「おいしいよ、たべないな」とわけてくれます。おじいちゃんは、くるまもうんてんできて、じぶんであるけます。だけど、あしもほそくて、「こしはしよっちゆういたいといっています。そして、みみがとてもおいなので、かいわがすこしいへんです。

おじいちゃんちで、かぞくであつまっておはなしをしていると、おじいちゃんはずききかえします。ほとんできこえていません。だから、おじいちゃんにちゃんと聞こえるように、だれかがみみもともういちどはなしています。みんながわらってはなしがはずんでいても、わらっていないときもあります。きこえていないので、うなずいているだけのときもあります。わたしは、なんだかとてもさみしいです。おじいちゃんもきもちになってみてもさみしいし、わたしもおじいちゃんとわらっておはなしがしたいからです。

おかあさんとわたしで、みみがきこえにくいおじいちゃんのおはなしを、いつしよにしました。「おおきなこえ」で「目をあわせながら」おはなしをする。つたわっていないときは「あきらめずにもういちどみみも

とでおおきなこえでいう。「それでもつたわらないときは「かみにかいてつたえる」ほかにも、あしこしがよわいおとしよりとかかわるときは、そのひととおなじスピードであるく。ちよつとおもたそうなにもつをもつていたらつだいたいとおもいます。わすれやすくなつているおとしよりがいたらいつしよにおもいだしてあげたいです。わたしがちいさいころからおとしよりにはたくさんやさしくしてもらいました。だから、わたしもやさしくしたいとおもいました。





## 伊勢地区医師会長賞

「誰もがくらしやすい社会へ」

小俣中学校 一年 深田 結月

ふかた

ゆづき



今年の夏休み、認知症についてテレビで知りました。テレビでは、認知症の人の仕事の様子や認知症の症状について放送していました。私は、もっと知りたいと思い、認知症についての本を読んだり、インターネットでもっと詳しい症状について調べたりしてみました。認知症のことを調べるうちに、どんどん認知症に対する興味が高まっていきました。

認知症は、記憶力や判断力などの脳の機能が低下して、日常生活に支障をきたしてしまう病気です。仕事をするにも、一人で簡単にすることは難しいようでした。テレビでは、カフェで働く認知症の人たちについて紹介していました。カフェの店長さんは認知症に対して理解のある

人で、認知症の人でも聞きとりやすい「ゆっくりやさしく話す」というのを意識されています。認知症の人たちは、ゆっくりとていねいに料理をはこんでいました。注文をとるときは、お客さんに注文を書いてももらったり、何度か注文を確認したりして注文をとっていました。認知症の人たちがカフェで働いている様子を見て、私のおばあちゃんを思い出しました。私のおばあちゃんは、野菜やハンドメイドのかばんをお店に売る仕事をしています。私は、おばあちゃん個性が詰まったこの仕事が大好きだし、おばあちゃんもこの仕事が気に入っているようです。だから、そんなおばあちゃんが、いつか認知症になってしまわないかと不安になりました。でも、先日、おばあちゃんに会いにいったときは元気そうだったので少し安心しました。

また、認知症の人たちの支え方について、考えてみました。認知症の人が働くカフェを見て、ききとりやすい声で話したり、忘れてもいいように紙に書いたりするという方法を学びました。他にも、明るい気持ちになる話をたくさんして、手厚いサポートをしていきたいなと思いました。

私が、認知症のことを調べているなかで、印象に残っている本があります。『認知症になっても人生は終わらない』という本です。この本は、認知症と共に生きている人たちが、自分の経験や思いを綴り、未来へ希望を持って生きることができている本です。私はこの本を読んで、認知症に対する感じ方が変わりました。私は、今まで、「認知症＝助けが必要」だと思っていたのですが、できることがまだまだあるという人もいるということがわかりました。それに、認知症になるのは、高齢者だけではないこともわかりました。「若年性アルツハイマー病」という若

い年齢で発症する認知症があります。認知症は、高齢者になるというイメージだったので、びっくりしました。「認知症になっても人生は終わらない」それは、認知症に対する理解を深めてほしい。私たちの状態をわかってほしい。というメッセージなのだと思います。認知症当事者の真っ直ぐな思いが、ひしひしと伝わってくる本でした。

伊勢市では、「認知症キッズサポーター」という認知症の人やその家族を応援する人を増やす取り組みをしているそうです。機会があったら、ぜひ行ってみたいと思いました。

今年の夏休み、認知症についてできたことは、とてもいい経験になりました。これからも認知症の知識を深めて、「誰もがぐらしやすい社会」を目指して、がんばっていききたいです。

## 伊勢薬剤師会長賞

### 「大切なぼくのばあば」



御園小学校 三年 小林 望華

こばやし

みはな

わたしは「ばあばは、だいじょうぶ」という本を読みました。この本を選んだ理由は、おばあちゃんが認知症になってしまう物語だからです。わたしにも毎日のように会って、一しよに楽しい時間をすごすおばあちゃんがあります。わたしにとって大切な存在なので、この本がとても気になり、読むことにしました。

この本は、小学生のつばさくんが主人公の物語です。つばさくんは、いつも、「だいじょうぶだよ。」

と頭をなでてはげましてくるばあばが大好きです。そんなやさしいばあばが、突然、

認知症になってしまい、何度も同じ質問をしたり、理かいないのできない行動ばかりしてしまいます。そんなばあばをつばさくんは、さけるようになっていましたが、ある日、ばあばがいなくなり、ばあばが書いたメモを発見すると、だんだんつばさくんの心が変化していきます。認知症と向き合う家族の心について書かれた本です。

わたしがこの本を読んで、一番心に残ったところは、寒い日にばあばがはだしで家を出てしまい、ばあばが書いたたくさんのメモを見つけたつばさくんの心が、だんだん変化していくところです。メモには、家の住所やトイレの場所、家族にあやまる言葉がたくさん書かれています。初めてつばさくんは、ばあばの苦しみや生きづらさを知り、やさしく出来なかったことを後かいして、心によりそうことが出来るようにな

りました。ばあばが帰ってくると、すぐにくつ下をはかせてあげて、きちんとあやまり、「だいじょうぶだよ。」

とばあばがいつものようにやさしく頭をなでる場面では、もう一度、二人の心が結ばれたのでとても感動しました。

わたしはこの本から、認知症のことや病気に向き合う家族の気持ち、かん者側の苦しみを学ぶことが出来ました。家族は、悲しくて大変な時もあるけれど、病気になった本人も同じように苦しい気持ちをもちながらすごしているので、よりそう心を忘れずに向き合うことが大切だと思いました。

この本を読むまでは、認知症のことを身近に考えることや家族が病気になった時の行動について、考えることはなかったけれど、これからは、学んで気づいたことを忘れずにすごしていきたいと思いました。そし

て、学んだことを人に伝えることも大切だ  
と思うので、一人でも多くの人が病気につ  
いて理かいをして、もっと温かくてよりそ  
う心を大切にされた社会になるように、わた  
しも社会の一員として、学んだことを活か  
したいと思いました。



## 伊勢志摩区域連携型

### 認知症疾患医療センター長賞

「安心して暮らせる伊勢市」



つじもと

ひまり

一見中学校 二年 辻本 陽梨

私は母と祖父母の四人で暮らしています。祖父は、体に麻痺があり、リハビリのためにもデイサービスへ週に一回通っています。他にも訪問看護を利用しています。最近は、少子高齢化が問題になっていますが、私が住んでいる町も高齢化が進んでおり、私の近所に住んでいる人のほとんどが高齢の人です。そのような町でも、みんなで支え合い、全ての人が安心して暮らせる地域になると良いなと思います。

では、安心して暮らせる地域にするにはどのようなことが必要でしょうか。例えば、地域の人との交流が多いところか、交流が

少なく、近所の人が誰か知らないところで  
はどちらが良いでしょうか。私なら、交流の  
多いところが良いです。交流を深めること  
で、一人孤独に過ごすことなく、孤独死を防  
いだり、毎日を楽しく過ごすことにもつな  
がると思います。地域のイベントや集まり  
に積極的に参加したり、誘ったりすること  
も大切だと思います。私たち子どもも、イベ  
ントに誘ったりイベント準備の手伝いをし  
たり、日常的にもあいさつをしたり、話をし  
たりと高齢の人との関わりも持ち、地域活  
力を向上することが大切です。

次に、介護施設や交通網、訪問看護などの  
十分な設備があると安心して暮らせると思  
います。交通網がしっかりしていると、病院  
などへ行くとき、足が悪かったりしても安  
心して行くことができます。ですが、バスな  
どを利用するとお金のことも心配です。そ

のため伊勢市が、バスの乗車券の交付を行っていると思います。そのような伊勢市が取り組んでいる高齢者の支援サービスも知り、必要に応じて、利用すると良いと思います。実際に私の祖父も訪問看護を利用することで、リハビリの方法などを専門的に教えてもらえて、ありがたいなと思っています。ですが、少子高齢化問題の背景もあり、介護職員の不足が見られます。実際に私の母が介護施設で働いていますが、職員不足もあるようで、とても忙しそうです。なのでこれからは、介護職員の人材育成や、若年層の関心を高める、最新技術の推進などで高齢者を支えられるようになると思います。

高齢化が進む今、若者の理解も必要だと思います。今の社会の状況を知り、できることから取り組んでいくことが大切です。私もこれから、みんなで支え合い、協力して少

子高齢化の社会を生きていこうと思います。  
私が大人になったとき、安心して働ける、年  
を重ねられる、暮らせる伊勢市であってほ  
しいです。



## 伊勢市立伊勢図書館長賞

「ぼくのひいおばあちゃん」



有緝小学校 三年 森 聡太

もり そうた

ぼくは、今までにん知しようについて考えたことがありますでした。でも、ぼくにとつてみ近なことでした。

ぼくのひいおばあちゃんは、昔の話を何度もします。そんなひいおばあちゃんに、ぼくは言つてしまいました。

「この前もその話してたよ。」  
そうすると、ひいおばあちゃんは悲しそう  
な顔をしました。わすれてしまふことつて、  
きつとこわくて悲しいことなんだと思いま  
す。それに、何度も話すのはひいおばあちゃ  
んにとって大切なことだからだと感じまし  
た。これからは、何度も同じ話をしてもそん  
なこと言わないようにしようと思いました。

ぼくは、にん知しようについて知りたくて、「おしえてくれる、わたしのなまえ」という本を読みました。この本に出てくるフィリスは、色んなことをわすれてしまいました。ぼくは、ひいおばあちゃんがそんな風にならないか心配になりました。 그레이スという女の子は、よくフィリスに会いに行きます。フィリスは、いつも 그레이スのことをだれだか分かりません。でも、何度も会ううちに、

「あなたは 그레이ス、フィリスと 그레이ス大のなかよし。」  
と言いました。ぼくは、とても温かい気持ちになりました。たとえわすれていても、心に記おくがのこっているのかもしれないと思いました。

ぼくのひいおばあちゃんは、食べれるりょうがへり、やせてしまいました。でも、ぼ

くがおにぎりをにぎってあげると、よろこんで全部食べてくれました。えいようのある物をいっぱい食べて、長生きしてほしいです。

ぼくは、ひいおばあちゃんが元気なうちに、おばあちゃんと色々なことをしたいと思います。大切な記おくが、ひいおばあちゃんにの心にとってほしいとねがいます。





## 伊勢市立小俣図書館長賞

「じいちゃんばじいちゃん」



御園小学校 四年 岩井 嘉之

いわい よしゆき

夏休みに図書館へ行きました。図書館で  
読んだ本の一さつに、「わすれないでね  
ずとだいすき」という本があります。この本  
は、認知しようのおばあちゃんとまごのお  
話です。ぼくは、この本を読むまで、認知し  
ようについて考えることはありませんでし  
た。広報いせの放送で、お年よりが行方不明  
になっているのを聞いても、「なんで大人な  
のに一人で家に帰れないのかな」とか、お母  
さんに認知しようの事を教えてもらっても、  
「ふーんそんなのがあるんや」と思うだけ  
で、あまり気にしたことも自分で調べてみ  
ようとも思いませんでした。でも、この本を  
何回か読んでいるうちに、自分で認知しよ

うについて調べてみようと思うようになりました。

認知しようは、だれでもなる可のうせいがあること、高れいになるほど発しようのリスクが高くなること、早く発見できればしようじょうをおくらせることができるということが分かりました。認知しようについて知ったことで、ぼくは不安になりました。ぼくのじいちゃんも認知しようになるかもしれない。ぼくの事をわすれてしまうかもしれない。そうになったら、どうしようかと思いました。ぼくのじいちゃんは、今は認知しようじゃないから元気いっぱいです。遊びに行くと、サッカーや野球、虫とりをいっしょにしてくれます。さい近は、しよぎのやり方も教えてくれます。いっしょに遊んだ日の事も、ぼくの好きな物もおぼえているし、ぼくの名前もちゃんとよんでくれ

ます。

もしじいちゃんが、認知しよようになったとしても、ぼくはじいちゃんの家遊びに行きます。ぼくのことをわすれてしまっても、ぼくはじいちゃんの事を知っているし、いっしょに遊んだり話をしたり、教えてもらったことをおぼえています。ぼくは、じいちゃんといっしょにすごす時間が好きです。じいちゃんのために何ができるか考えて、今まで通りじいちゃんといっしょに遊んだり、話をしたりして楽しくすごしたいです。

